

## 徒然(つれづれ)の記 その一

### バーベキューと火

先日、娘一家を誘って、家の近くにある平井川の河原へバーベキューに出かけました。

娘も婿さんもガスしか使ったことがないので、バーベキューコンロの炭に火をつけてやりましたが、用意した手作りの火吹き竹が威力を発揮しました。

焚(た)きつけの木が燻(くすぶ)っているところに向かって息を吹き込むと、小さな火が現れ、炎となり、それが見る間に大きくなってまわりの炭に燃え広がっていく。

…その有様を見て、ふたりの孫は、目を丸くして驚いていました。

少し離れたところで、数人の高校生のグループが、火を熾(おこ)そうとしていましたが、うまくいかずに悪戦苦闘していました。

火を使う機会が無くなってしまったのですから、無理ありませんね。

息子の家はオール電化になっていて、家の中では、まったく火を使いません。

私の住んでいるあきる野市では、かなり前から戸外で焚火が出来なくなっていました。市の条例により、禁止されてしまったからです。

それでも、例外があり、農家の人や畑で枯れ草を燃やしたり、田圃で稲藁を燃やしたりするのは認められています。

濃い煙が黄昏(たそがれ)の野面(のづら)を這って横に流れていくありさまや、農家の中庭で落ち葉や藁屑(わらくず)を燃やす薄煙が、屋敷林の梢に絡(から)まるようにして空に立ち昇っていくありさまは、一幅

(いっぶく)の絵のように見えます。

ウォーキングの途中、こうした光景に出会うと、とても懐かしく感じてしまいます。

人類は、火の、計り知れない恩恵を受けてきました。

しかし、時の流れとともに、火の使い方や道具は変化し、家の中から囲炉裏(いろり)が姿を消し、薪や炭に代わってガスや灯油が使われるようになり、竈(かまど)やコンロが姿を消してしまいました。

オール電化の家が登場するに及んで、熱源や光源は電気にとって代われ、家の中で火を使わない家庭が増えてきました。

火を使う機会は減るばかりです。やがて火を使わない日がやって来るかもしれません。年寄りの繰り言と笑われてしまいそうですが、思いつくまま、失われてしまった、あるいは、失われつつある火の文化のあれこれを書いてみることにしました。